

山とスキー

第八十三號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和三年六月廿八日印刷納本

昭和三年七月一日發行

(每月二回)
(一日發行)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號三十八第



記事

オリンピックアードのスキー競技を観る (二)

廣田戸七郎 (一)

ノールウエー行

廣田戸七郎 (二)

ホルメンコーレンのスキー大會

伴素彦 (三)

五月の針ノ木岳

小池文雄 (六)

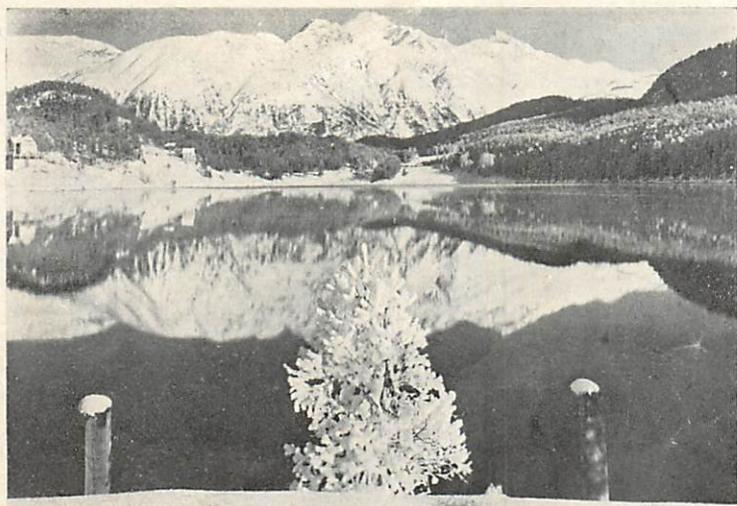
寫眞版

サンモーリッツ湖畔

スキーミジウムの前にて

伴素彦

昭和三年七月發行



5368 Am St. Moritzersee

サン・モリッツ湖畔

オリムピ
アーデの スキージャムプ競技を觀る (二)

廣 田 戸 七 郎

私の記事がなか／＼に本論に入らないので氣を腐らしてお終ひの方も少くないかも知れません。何卒お許しを乞ひます。

此處では又私はオリムピアーデのジャムプ競技の身に入る前に例のオリムピアシヤンツエの事を書かせて頂きます。

オリムピアシヤンツエと云ふのは御存じの通り、昨冬例のドイツの航空力學の大家ストラウマン氏の設計によつて出来上つたものです。そして今年のオリムピック大會で使用されたものです。

ドイツのエンデニアであるストラウマン氏の理論については本誌では、已に木原氏、青木氏等が可成り精しく記して下すつた。少くともストラウマン氏は、例のタムスの新しい飛型と所謂航空力學の見地から、兎も角從來迄餘りに抽象的であつたスキージャムプといふものに、純理論的の解釋を與へた人である。即ち氏の出現によつて始めてスキージャムプ競技なるものに數字的の説明が見らるる様になつたのである。聞く處によるとそのストラウマン氏の設計が誤つた爲に、昨年のオリムピアシヤンツエでの *Eröffnungs Konkurrenz* では、期待されて居た六〇米、七〇米は愚か五〇米のレコードさへも出さず、僅々四〇米足らずの飛行レコードで終つたと云つて、随分ストラウマン氏の設計を責め、且つその理論をケナし、且つ氏の信用問題迄も引き起したと言つて居るけれど、實際その *Eröffnungs Konkurrenz* の時には未だ充分完

工されて居なかつたらしいのである。氏は自分の理論を一層確實なものにしやうとわざ／＼昨年ドイツの自分の研究所で飛行模型を作つて實際と理論の一致をつきとめて居る程熱心にスキージャムプの飛行を研究して居る人である。(この詳録は一九二〇年?のスイススキー年報に載つて居る) 少くともストラウマン氏は世界のスキージャムプ界に一つの光明を與へた人である。そうして氏はたしかにスキージャムプ界のエポックメイカーである。其點に於て氏は敬すべき人であると思ふ。

競技當日のオリムピアシャンツエ

私達がサン、モリツツに着いた時には、已にオリムピアシャンツエは完成して居た様であつた。未だ見物席の二、三が工事中であつた。其當時の新聞によると見物席が優に二千人を入れるに足るだけ完成したと報導して居た。

オリムピアシャンツエは、サン、モリツツバードから徒歩で約三〇分程かかり、バードの南方にあり、サン、ギイアンの森に包まれた靜かな處に、西北へ向いて作られてある。

大會當日、何と云ふ素張らしさ、何といふ派手やかさ、何といふ美しさと云ひたい處であるけれど、オリムピアシャンツエ其物の厚化粧や、中天高く立並べられた万国旗などは、大會氣分として少しも氣分を悪くした様には感じなかつたけれど、餘りに見物の氣分がお祭氣分で見居る様な氣がして嫌な氣がした。見物人の派手な服装、それはまあ仕方ないとしても、馬鹿らしいと思はれる位に馬櫃の厚化粧したのがチャラン／＼音を立てて連つてシャンツエに来るではないか。

乗合せて居る連中と云ふと毒化する様な油っこい様な人達ぢやないか。全く氣分をそぐこと一入でない。でも是だけの見物人、これだけの馬櫃がよくもちつほけなサン、モリツツの町から出て來たものだと思はれる位見物が押し寄せた。午後純ジャムプ競技の時などは、二〇フラン(邦貨約九圓)の二千もあるスタンドがギツシリ詰つて居た様であつた。見物人が惡どいとは云ふけれど、随分競技そのものには理解があるやうであつた。何處の國のジャムバアが飛んでも遠くへ飛ぶと盛んに拍手を送つて、ブラボーを叫んで居た。こんな氣分は一寸外國でなくつちや味はうことが出來ないんぢやない

ングヒルは思ふ様に修理がつかかなかつたものと見えて、世界第一のジャムブ競技をやる大會のコンデイションとしては、遺憾乍ら申分ないものと言ひ得なかつたやうであつた。着陸斜面は相當に踏みつけられて適當な軟かさにはなつて居たが未だ處々に堅い雪の塊りが残つて居た。アプローチはとても問題にならぬ位堅くなつて居た。非常にスピードが出る。ジャムバアの体が揺れて全く氣の毒な位であつた。シャンツエは平常の時よりはもつと下向きになつて十五度位はあつたと目測された。

競技開始に先ちスタート地點決定の問題

競技開始に當り、スタートの位置決定が可成り問題であつた。斜面が平常の様な氣持の良い滑り易い状態にない爲に、強もすれば禍さへ懸念される様なコンデイションであつたからである。一者は途中の八〇米邊を説き、一者は大會二、三日前に臨時設けられた七〇米邊とすべしと説いて居た様であつたが、結局七〇米邊のスタート臺に一致した様であつた。

午前はコンバインドのみの競技があり、午後は純ジャムブ競技が行はれた。

午後の純ジャムブ競技の時にも一回廻りジャムブが濟んでからレコードが出ないといふのでスタート臺を上段にあけるあけないで三〇分間位審判員が議論して居た様であつた。

ドイツ、スイスを始め中央方面の側は上段に上けることを説きノールウエー、スウェデン、フィンランドの北歐側はそれを今日のコンデイションでは甚だ危険であるからと云ふ理由で否とした。結局北歐側の讓歩する處となり上段からのスタートも許されることになつた。そして競技の第二回目に移つて、此二回目どうく／＼タムスが七三米といふ驚異的レコードを出して轉倒して胸部をシタ、カ打つて氣絶したといふ不詳事を産んで終つたのであつた。

終りに

未だ私の様なものがオリムピアシャンツエがどうの斯うのと申すには、餘りに潜越過ぎることではありますが、たゞ私は今度見たオリムピアシャンツエから、ジャムビングヒルについての少し感じたことを一、二記して見たいと思ふ。

で最大傾斜が三十六度もある。ランディング斜面の両側は雪で堤の様に斜面の上方から下方まで約一米位の高さで雪を積み上げてあつた。そしてその内側の方には斜面を修理する人しか入れない様になつて居て大へん氣持が良い。アプローチが最大傾斜三十四度半ある。シャンツエの端で滑り出すジャムバアのスピードを測ると毎秒二〇—三〇米位出る様である。ヒル全体が森で囲まれて居るので風當りも弱い。(尤もサンモリツツ其者が平常餘り風などの吹かない土地である。)従つて斜面が急に凍りついたり、融け出したりする様なことは先づ殆んどない位で、餘程の天候の變化でもなければ斜面の雪質が前日と翌日と急激に變つて居て飛べぬ様なことはない。

オリムピアシャンツエのプロファイルは挿圖の様な工合に出來て居る。

審判席は、嘗てオリムピアシャンツエの寫眞を見たことのある人は御存じと思ひますが三層臺になつて居て、ジャムバアのスタート番號と飛距との掲示板が其處に取つてある。そしてシャンツエの端から三〇米位の下方左側に設けられて居た。高さは優に地上二〇米はあつたと思ふ。練習の頃私はよく此處へ上つて見たが、着陸斜面が急であるだけに實に物凄じ感じがした。全く六〇米前後飛んで行くジャムバアの姿を見て居ると谷底へ落ちて行く様な氣がした。

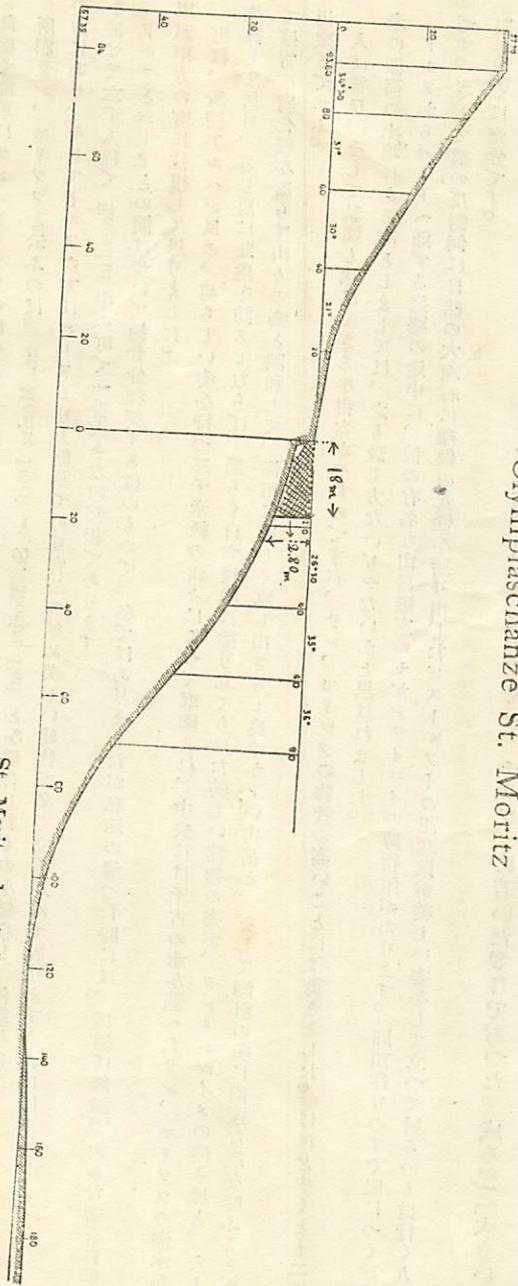
未だ私達の行つた月、つまり一月中では、餘り他國の選手がやつて來て居らないで、僅かにスウイスの選手が極く少人數飛んで居た程度であつたけれど、上段からスタートせずに中段から出て五〇—六〇米近くを飛んで居た。

大會を前にしてとうとう、Foorの來襲を受けて氣温は昇る空は泣き出すと云ふ始末で、流石のオリムピアシャンツエもすつかり平常のコンデイションのよりを戻して終つた様に、ガラリと斜面のコンデイションが變つて終つた。飛ぶ方は無論論困る、一層困り切つたのが主催側の當事者である。雨の後を受けて朝夜の雪温の低下に一度融けかけた雪がパン／＼に凍つて終つた。止むを得ず二月十五日以後は午後二時—四時限り練習を許さないことになつた。そして一度すつかりスコップで斜面の雪をくだいて、馬力をかけて斜面を修理した。

大會當日のオリムピアシャンツエのコンデイションは、申分なく周りの飾りつけは出來上つた。けれど大切のジャムピ

將來があると思つた。といふのは、只々規模が大きいくだけで少しも怖しさが感ぜられないのである。私が見てさう

Olympiaschanze St. Moritz



St. Moritz, den 7 Februar 1927
Vermessungs- u. Tiefbauknean K. Troeger.

思つた位であるから、現在張り切つて飛んで居る日本での第一流處を連れて來れば大丈夫飛ぶと思つたのである。何しろランディング斜面が大へん良いコンヴェックスに出來上つて居る。そして巾が廣い。シャントエの附根邊で三〇米はあらうそれからずーと下方に向いて開いて居て、圖に見る八〇米邊では、六―七〇米位あつたかと思はれた。傾斜は可成り急

かと思つた。

見物席は、一等、二等、三等、四等とあつて、一等が二〇フラン、二等が一〇フラン、三等が五フラン、四等が立見の場處で二フランかと思つた。何でも席の設けのあるのが一、二等とかで、その切符はもう競技前にすっかり賣り切れて終つた相で大會當日にはプレミアム附に羽根が生へる程ドン／＼高く賣れて居た相である。

此處で簡単にサン、モリッツの町のことについて記して置きませう。

所謂サン、モリッツと云ふのは、St. Moritz Dorf と St. Moritz Bad とを併合したものを總稱し、停車場はサン、モリツツドルフの方にあり、そしてドルフの方はバードよりも繁華であり官公衙始め美しい建物が多く立ち並んで居ります。人口はドルフとバードとを併せて六千人程で Engadina 中の町で一番大きな町だ相であります。

ドルフとバードとの間は歩いて約廿分程要する位のもので、冬ではありましたが私達の参つた時には、馬櫃は無論、大きな乗合自働車が兩方の町に往復して居りました。

町は、所謂アルペン風の、男らしい姿を持つ三千米級の山々によつて取圍まれ、中央には千古の水を湛へたサン、モリツツの湖水を抱擁して居り、若し夏に此處を訪るゝならば、恐らく白や淺緑に塗り立てられた美しい建物の姿が、タンネンホイメの濃き緑と、そして残雪に膚化粧を凝らす山々の姿と調和して、湖面に美しく寫し出さるゝ奥ゆかしい山岳と、そして湖沼の美に陶瀟な趣を味ふことが出来るでせふ。

人は言ひ、そして私達も味はゞざるを得なかつたのですが、サン、モリツツの物資の高いことには驚きました。けれども少くとも二千米の標高の土地にある町としましては、之も致し方ないぢやないかと思はれました。

ドルフからバードへ通ずる道路の途中に、彼の有名な山岳畫家のセガンティニの博物館があります。圓頂作りのすぐ眼につく建物です。そして道の反對側に自然の大理石に裸像の女性を彫り出したピストルフィの記念像が美しい姿をして立つて居るのも道行く人の眼を引くに充分です。

音に響いて居るオリムピアシャンツェを見物に出かけたのがサン、モリツツに着いた翌日であつた。成る程「大きいなあ」と云ふ感じがした、然し何となく飛行して行くのは割合に樂に見え、大して怖氣心も出相にも見えない。是なら内の連中が四、五人揃つてやつて來れば大丈夫四〇米は飛ぶと思つた。此臺を見て私は日本のスキージャムブも大丈夫大いに

オリムピアシャンツエに關する記事は、何れ一九二八年のスイスのスキークラブ年報に、當のストラウマン氏が充分な研究資料をあけて詳細に報告することであるから、私達も一日も早くその年報を手に入れたいと思つて居る次第です。

已に近代的シャンツエ築造に關しては、私共の常に畏敬して居る木原さんが詳述されて居りますから私は駄文を連ぬることを避けて、どんな風にオリムピアシャンツエを見たか、そしてそれからどんなことを學んだか、と云つた様なその當時のことを憶ひ出して極く簡單に記して見ませふ。

一、ヒルの向きが西北で、而も兩側がタンネンボイメで取圍まれて高い山を脊にして、而も下方の平地は充分餘裕があるといふことは地位として申分ないと思はれました。そして斜面の雪質状態が可成り平均してよろしいこと。

二、オリムピアシャンツエは、所謂近代的シャンツエとして理想的に設計せられたものでありました。流石にその規模の大なることと、設備の充分なこととヒルの全体が整つて作られて居たと思ひました。

三、純粹の競技用のジャムピングヘルとして少くとも上出来のものであると思ひました。

四、相當の都會に近く、交通も至極便利な地にあること。

是等は少くとも大ジャムプ競技に使用さるべきジャムピングヘルとして具備せねばならぬ主要條件であると思ひますがその條件をオリムピアシャンツエは充分に供へて居るものと思ひました。

更にヒルそのものとしては、多くの期待して居るレコードも練習から已に六〇—七〇米は出て居て、先づ豫想通りのものが出て居る様に思ひました。たゞ附屬設備から言ふとスタンドが全部ランディング斜面を離れてずつと圏外の兩側に作られて居たのは纏つて居る様に見えたが、やはり上等席はランディング斜面の兩側にも作られてある方が良くないかと思つた。

「馬鹿に大きい」と云ふ感じ、それは決して飛ぶ者の心を左程に怖かすものでもなく、又恐るるに足らぬものであることを私は此處に附け加へたい。

何故そんなに規模の大きいものを作つたのであらう。それには理論もなければ何も無い只々餘りに二、三年前レコードに多くの人が捕はれた爲であつたのである。ハウゲンがアメリカで七〇米飛んだ。ルードがノールウエーで七二米飛んだと云つた報に無暗にジャムバアが野心に燃え、そして觀衆が興味に捕はれた結果、さて此度のオリムピックで百米位飛ばせて見たい。飛んで見たいと言つた様な氣分が、とう／＼斯うした「馬鹿に大きいもの」を作らせて終つたと解決する外に解し様がない。さうした選手の持つ好奇の野心、觀衆の諧謔的な氣分がすっかり此オリムピアで裏切られた様な氣がした。人間の力には限りがあつたことをよく名人タムスは表現し、遂に不詳事を惹起して終つた。そして決してジャムブなるものが觀衆を無暗に喜ばせたり、オドケた氣分で見せたりする様な輕業の様なものでない。本當に眞剣なスポーツであることをよく説明してくれた様に思つた。そして觀衆の心に、より強くスキージャムブの眞價を沁みつけてやつた様な氣がした。

私は何れE. J. S.の會議に協約されたジャムビングヒル建設に關する記載をする機會を持ちたいと思ふので此處ではその事に筆を走らせません。

兎に角私はジャムビングヒルさへ大きければ、遠くへ飛べる。レコードが出せるといふ考へ方の誤りであることを申したいと思ひます。

實際の處ノールウエー邊りの飛び方と日本の現在の飛び方はサツツに於て根本的に方法が異つて居ると思はれる。若しもサツポロシヤンツエにノールウエーの一流處を連れて來て飛躍させたなら、體かに五〇米近くのレコードは出るであらう。現在の日本の飛び方が改良されたならば、現在ある臺で一〇米や一五米のレコードを延ばすことは強ち困難ではないかと思つた。

然し私達は現在日本にある競技用ジャムビングヒルに望ましいことがある。それは可及的附屬設備までも完全したいといふことである。

完全した設備と申しますは、ヒルそのものの外に、審判席や、見物席や、スキー置場や、更衣所、掲示板、アナウンスなどの後、の方の設備の整つたものを指して言ふのです。實際さうしたものが出来なくつては外國からトレーナを迎えることも出来ないし、又最も可能性のあるスキートの國際競技を他の運動に先だつて日本へ持つて來ることが困難であると思ひました。

何となく横道へ入つて終ひました。

私達は競技用のものと練習用のものとの區別に對する觀念をもう少しはつきりと持たねばならないと思つた。

私もよく向ふで聞いたけれど、多くの外國の一流處の話してくれた「大きい臺で疲れて飛ぶよりも小さい臺で充分練習するがよい。」とは至言であると思つた。

あの大きなオリムピアシャンツェで如何に馬力をかけて飛んだ處で精々一日に四本位しか、しつかりとした飛躍が出来ないであらうと思ふ。ポントレシイナの臺も亦さうである。實際大きな臺で数だけ飛ぶことが出来ても數が多くなる程小さい臺での回数に比して自體の疲勞の程度が多くなるばかりである。然し空中で長い飛行に慣れる必要があるから全然大きい臺を飛んで見ないこともどうかと思はれるけれど、然し五〇米前後の飛躍で練習をして居たノールウエーの連中には七〇米以上の飛躍が敢て困難でなかつた様であつた。

ノールウエーのホルメンコーレン競技では、競技用のジャムピングヒルと練習用のとに對する觀念が全く區別されて居る様に思はれた。例のホルメンコーレンのシャンツェの競技では、全然競技出場者に競技會前の使用を許さず、而も亦競技會當日試験飛行をも許さないのである。さうした競技會で二百何十人が僅々三時間足らずの間に何れも張り切つた飛躍で競技を終了するんだから全く驚いた。若しも競技會の前にホルメンコーレンの様にその競技用のシャンツェで練習や試験飛行を許さないといふことになる、全く競技者は實力で行かねばならないことになる。夫故何時までも大會用のシャンツェのみにコヂリついて今日は何本立つた昨日はどうと云つて練習せねばならないといふことは、全く愧しいことに

なる。

この意味から言つても、亦實力を充分持つ意味からしても、小さくとも種々の練習臺を経験して置くことが大へん必要なることになる譯である。

私は十七日に S. S. V. の招待に出かける皆の許しを得て午後から案内せらるゝ儘に Bernina Bahn に乗つて Bernina Pass の途中にある Alp Grüm へ出かけたので歸りが夜になつて終つた。町の角で小供が "Tages Programm für Morgen," と叫んで傍へ寄つてくるので、早速買求めて宿に歸つた。

ノールウエー行

廣 田 戸 七 郎

ノールウエー行、實はホルメンコーレンの事を書くだけでノールウエーの大切なスキー記事と申しますか收穫と申しますか、さうしたものは、出来上るのですけれど、私達にとつて少くともノールウエーの二週間は一番今度の渡歐で憶ひ出での多いものなのです。私達には本當にノールウエーが忘れられないのです。私はその憶出てむたどらうとして此處に是からノールウエー行と題をとりまして、暫く氣の向く儘に書いて見様と思ひます。何卒御了承下さい。

ノールウエーへ

とうとうノールウエーまで出掛け得る餘裕—金と時—が私達のオリムピック競技後に確かとなつた。

ノールウエーへ行くことについての前後の事情は、貴重な紙数を費す程のことでもないから此處では略して、唯私達は次の大きな一つの希望を以てノールウエーへ出掛けたといふことを此處に前書したいと思ふ。

その希望といふのは、私達はサン、モリッツへ着いてそしてイタリー、クロステルと競技會に各地を巡り歩いて最後に再びサン、モリッツへ歸つて第一使命のオリムピアーデに出場したのであつたけれど、此間、全く忙しいの一語で盡きる生活で日を過ぎた様なもので殆んど落ついて、外國の一流處からコーチを受くる暇もなく又選手達の日常生活に接して、片言だけの話でゆつくり話し合ふ日も持つことが出来得なかつたのであつた。

私達の第一使命は兎に角皆がお互のベストを盡して戦つたそれで使命だけは果せた譯であるけれど、どんな收穫と言はれて見ると体よく日本へ持ち歸ることの出来る様な收穫らしい收穫は一つもなかつたのであつた。で私達は此機會に一つでもよいだらう、何か母國へ土産になるものを持ち歸らう。期せずして皆の氣持は此處に集り、そしてノールウエーへ出かけて良いトレーナーを迎へてスキーのトレーニングを受け、又それに關聯したものを多く聞き、出来るだけ多くを視て歸らうといふことに議が一決したのであつた。それが私達の第一の希望であり、そして最終のものであつたのである。

何故ノールウエーを目指すに到つたか、再び私は此處で前述の通り六ヶ敷い、混み入つたことを述べずにたゞ本當の氣持だけを記すことに止める。

ノールウエーへ行きたい。この氣持は日本のあらゆるスキー家の持つところである。そして事實日本に居るスキー家でノールウエー行に憧憬を持たぬ人は先づないであらう。特にスキースポーツ（廣義に解釋して欲しい）に興味を持つて居る人は言ふまでもなからう。無論夫れに全力を傾注

して居る人達は申すまでもないことである。

私達は文句なしにノールウエーへ行きたかつた。木や寫眞で見て居た實物が、すぐ私達と隣り合つて活動して居るではないか、それを見ただけでも、亦さうした人達と挨拶を交したり、いろ／＼面倒見て貰つたり、進んでは向ふからノールウエーへやつて來ないかと云ふ直接的な勧誘さへ受けるやうになつた私達の氣持、それがどんな氣持であつたか皆さんの御推察に任せたいと思ふ。

全くウヅ／＼する氣持とは、こんな時の氣持を言ふのかとしみ／＼感じた。

何しろ瑞西のサン、モリツツと狭い海峡と言つても兎に角海を渡つて行かねばならないといふノールウエーのオスローまで、僅か二日で行けるのではないか。又の機會を選んで日本から出直すには一ヶ月は優にかゝる。無論費用も立て直して二千や三千用意して日本からスタートせねばならない。金もサン、モリツツからノールウエー迄行つて、そして船で歸るだけは未だ残つて居るし、日數と金と相談しても大丈夫苦しむ必要もないといふことを確と調べて、實はノールウエー行を決定した譯である。

單にトレーニングを受けるだけなら、わざわざノールウエーへ行かすとも、スウイス、ドイツでも良い譯だが、今度のオリムピアードを通じて見た結果、矢張りノールウエーが第一人者であることを見極めることが出来て、實は餘りに打算的の様ではあつたが、ノールウエーを選んだ様な譯であつた。

私達はノールウエーへ行つてそして立派な選手と一緒になつてスキーテクニツクやワツクステクニツクを習ひたい。又機會があるならばノールウエーのスキー製作も見たい。又ノンビリとした氣持でノールウエーの森々の間をぬけてトゥルをもやつて見たい。そしてよく完備して居るスキー場をも視、又何の位の程度にまでスキーが普及して居るものかその様をも知りたい。更に事情さへ許すならば、スキークラブの組織や事業や又競技會などのどの程度にまで秩序立つて居るものと云つた様なことにまで立入つて見學し窮め知りたいといった氣持、それが私達をノールウエーへ旅立たせたのであつた。勿論ノールウエーの自然と人情とが私達のノールウエー行の氣持を更に培つたことは申すまでもないことである。

急ぎ旅に慣れ切つた一行は、ノールウエー行きが決定すると同時に譯もなく出發準備をしてくれた。

サン、モリツツを去る

朝な夕な陽に照り映ゆる瑞西の山々の眺めは、此國を一度訪るゝ人々に必ず／＼深き／＼善き印象として残るであらう。まして異郷遙かに遠征の途にある若者、平和の戦場への使者達の心に強く云はんかたなき印象を刻むに充分であつた。心落ちつく暇もないまでに忙しい生活に日を追はれて居た一行ではあつたが、オリムピアードの騒々しさが過ぎて終ふてからは、全く始めて靜かな氣分のするサン、モリツツの冬を味ふことが出来得た氣がした。

競技がすんで一時の間ではあつたが、私は青空にクツキリとした輪廓を現はして靜かに明け暮れ行くサン、モリツツの村を圍む男性的な美しい容姿を持つ山々を眺めて、本當に落着いた氣持になつて、始めて自分が世界的に有名な天然自然の美の國瑞西、さうして世界の遊勝地であるサンモリツツに來て居ることを發見することが出来た。そしてその瞬間こそ永久に私をして自然の美とそして人事の力を

遺憾なきまでに發揮して居る瑞西の國に愛着の念を抱かせて終つた。

永い間厄介になつた人達へのお禮とそして宿の Direktor をやつて居るフオーゲルといふお婆さんとベテイといふ會計さんに堅い別れの握手を交して私達は別れを惜しみつゝ馬橋の人となつた。馬橋が坂を下り切つてしまふまで互にハンケチ、帽子を打ち振り乍ら別れを惜しんだ。

向ふの人達は他の國へ行くことは少しも億劫に考へて居ないらしい。だから私達が今度オリムピックに來たのも漸うやつと來たのであつたが、向ふの人達はそれを察してくれぬのか、それとも私達日本の國を買被つて居るものか、日本は財産國だから何時でも來れるだらう、又來年の冬にでも來ないかと云ふ様なことをしきりに言ふて居た。遺憾乍ら私達はそれに對して只日本のスキー界が許すならばと答へるより外に答方を知らなかつた。

Engadin の名は、もう日本に居た時から、例の Wunder des Schneeschnhubs の活動寫眞で知り切つて居た、そして今度始めてその Engadin の中心をなすサン、モリツツに暫らく滞在して Engadin の氣分も可成り味つた。そして漸く

Engadin の山々や村々の名も知り Engadin に暮らす人達の中にも知り人や友達も出來る程になつた私達が、愈々此處に別れを告げねばならぬかと思ふと、實際悲しい様なをして淋しい氣持になつた。

出發する其日は、朝から珍らしい良い天氣の日であつた。ボカ／＼と照る陽は、丁度春先の陽を受けて居る様であつた。そして空は一面に晴れ切つて山も野も森も谷も、そして町々の軒々もハッキリとした姿をして明るい氣持で私達を見送つてくれるやうであつた。

幾つかのトンネルを抜けて、狭い谷の間を通つて私達の車は一氣に二千米に近いサン、モリツツから惜し氣もなく下り續けてサマーデンを過ぎてオーストリー領に一寸入つて翌朝ベルリンに着いた。一行は小島さん、小高さんを加へて賑かに車中を送つてベルリンに着いた。

ベルリン着

出迎へに誰か來て居るかと思つたが、岡田さんのもとへ打つた電報が間に會はなかつたと見えて、岡田さんの顔も見えぬ、小島さんの宿の方へは小高さんが行かるゝことに

なり、私達は取敢えず岡田さんの下宿へ行くことにした。二臺の自動車に分乗して私達は岡田さんの下宿を訪れた。幸ひ在宅であつた。早速宿のことを頼んだ。日本人にお馴染のバンデオン、エリクセンに落つくことが出来て大へん好都合であつた。

サン、モリッツで終りを告げねばならぬ筈のオリムピツクの座談會があるので此處で開催することにした。夜大分遅くなつて始めたのでなか／＼進まない。時間は容赦なく過ぎる、とう／＼午前一時半頃になつて終つた。漸く其時五〇軒レースの分が済んだ。では後はノールウエーへ行つてからやることに仕様といふことにして終る。

翌日一日中費して麻生君と一緒に私は日本の大使館に行つてノールウエー行、英國行きの旅券を作つて貰ふ。それからノールウエーの公使館に行つて査証を作つて貰つて、とう／＼時間がなくなつて英國の大使館の方へは行けなくなつた。止むを得ず此方はノールウエーへ行つてから査証して貰ふことにした。そして廿四日の午後五時近くのオスロー行きに乗込んで一路ノールウエーへ向つた。實はノールウエー行きは、未だ金の見當のつかぬ頃しき

りにノールウエースキークラブの會長から来るやうに勧誘されて居たけれども、何しろ時間とそして費用の方が心配でもあり、亦見當もつかなかつた爲に一旦斷つて終つたのであつた。それでノールウエーではもう駄目だと見て、とつくに土地の新聞に到底日本選手來訪の見込なしと云つた記事が掲載されたやうであつた。それが急に行くことに決つて而もサン、モリッツで電報を打つ暇がなかつたので此處(ベルリン)で打つて知らせる必要があつたのである。發車前の數刻でこの事を片附けた様な工合であつた。小島さんと小高さんは、私達の撮つたフィルムの整理で三、四日遅れてオスローへ來らるゝことになつた。

首都オスローに着く

ドイツの Sassnitz Hafen からスウェーデンの Trolleborg に渡り Gøteborg を經て北歐特有の Ford を車の右に或は左に見乍ら、海岸地に亦獨特の岩壁や豊富な北歐の森林地帯を通つて私達がノールウエーの首都に着いたのは、廿五日の午前十一時半であつた。

驛に車が着くと多勢ノールウエースキー倶楽部の人達が

出迎へて居られた。又イタリーの學生大會の時に仲良しになつた連中もわざわざ出迎へて居てくれた。出迎への中に日本人を母に持つて居るノールウエーの一青年がつかつかと車に入つて来て、始めは少々英語で話し出して居たが、先生こちらの英語が情ないと見たらしい。「私チイート日本語が話せます」と言つて日本語で話してくれた。

聞けば先年大阪の極東オリムピックの時に水泳のオープンに出場して短距離でレコードを作つたオルセン君であつた。私達は顔は知らなかつたけれど名だけはその極東大會と引つゝけて知つて居たからすぐ話が合つた。此人が居た爲にどんなにか私達の今度のノールウエー行が幸福であつたか判らない。オルセン君のことは別に又何處かで書けると思ふから此處では略す。

車から下りて驛に出るといきなり新聞社の寫眞班の襲撃に合ふて記念撮影をして貰ひ終つてクラブの人達に一々挨拶を交してプラットフォームを出た。荷物だけを待設けて居た自動車に乗せて、私達は指定の宿まで徒歩することにした。街の気分はさうやらベルリンや、サン、モリッツなどゝ異つて居る様な氣がした。スキーを飾る運動店のシヨウウ

インドウが私達の眼に一番先につく。町歩く人達が例によつて私達異國人、特に黒く雪焼けて居る私達に一齊に視線を向けて送迎して居た。私達の宿はホテル、サボイと云つてオスローの大學のすぐ近くのホテルであつた。玄關は馬鹿に薄暗い。太つたドイツ語の達者な餘り人相の良いボルチエが私達を出迎へてくれた。恐るゝ中に入つて部屋を決めて漸く一部屋に三人と他の二部屋に二人宛入ることになつて落つた。

例によつて私達の陣取つた部屋はホテルの最上階五階の中央三つであつた。北歐の天氣が悪いのか、それとも部屋の窓が狭いのか嫌に薄暗い感じがした。ホルメンコーレンシャンツェは電車でオスローから三〇分足らずで行けると聞いて、晝食をとつてから行くことにしてオルセン君に案内を頼んだ。

オスローの町の事を簡單に記さう。

オスローは御存じの通りノールウエーの首都で、北緯五九度五五分東經一〇度四三分にあつて、一方は海にそして反対がホルメンコーレンの方に向ふ丘續きになつて居る。ずつと古い頃にオスローと呼ばれて居たらしいのが一六二

四年かにクリスチアン第四世が、殆んど今日の様な大都會を築き上げたらしいのである。そして自分の名にちなんでクリスチアニアと名づけたものらしい。それを今の皇帝になつて數年前再びつと昔に溯つたオスローと云ふ名に變へられたと云ふことである。人口は約廿五万ある。スウェデンのストックホルムと共に北歐文化の中心をなして居る市内には勿論冬でも電車、自動車を通つて居る、市の中心をなす公園の一方に國立劇場がある。其處の向ひに有名なイブセンが冬外套を纏つてミユウツエを被り、ステツキを突いて路上を行く姿で、長い鬚を生やして、藝術家らしい顔をして立つて居る。

未だ私達はロンドンを見ない前ではあつたが、何となく男女の姿が英國式のデエントルマンやレデーを見る様な氣がして、上品な氣持がした。人情に篤いことは、私達が今度歩いた國々で味つた中で一番の様に思つた。私達は手篤く歡待^ムなされ、そして心から嬉しい美しい印象を持つことが出来た。

私達が訪れた頃のオスローの町には、厚毛の外套に包まれて道行く人、スプリングコートや、レインコートを被ふ

て居る人、其姿は色とりもではあるが、輝く太陽の光りと熱には充分春の色が漲つて居た。

競技前のホルメンコーレン見物

晝飯を食つて新聞社の人や、スキークラブの人達の訪問に應接して居る間に三時過ぎになつた。温順な明るい顔のオルセン君が迎へに来てくれた。早速スキーの用意のある連中はスキーを持つて、用意のない人は持たずにホルメンコーレンへ行くことになつた。

ホルメンコーレンは、オスローから六軒半ばかり離れて居る。市電を *Majostenn* に降りて其處から郊外電車に乗換へるのである。

このマヨルステウム驛からの郊外電車は市内電車よりも大へん氣持が良い。ドイツやスウイスの様に *Rancher* と *Nicht Rancher* との區別があつて座席はローマンズカー式になつて中央に通路がある。窓の外縁にスキーを立てかける様に設備がしてある。此設備のある電車は他の國では見なかつた。

電車はマヨルステウムの驛を出るとすぐ軽い登りを走ることになる。沿線の左右は一面田畑か牧場地らしい割合に

平坦な續きになつて居る。日本の郊外に見るよりも、もう少し増しだと思はれる文化式的住宅が點在して居る。

建物の建て方と言ひ、塗り方と言ひ、日本の文化式のものよりは、遙かに周囲の自然の景色と調和して居る。だから日本のものよりは増しだと思つた。

二軒ばかり車が走ると、坂路が可成り急勾配になる。次第に車の左側の眺望が展けて来る。そして三軒程行つた處に *Standa* と呼ぶ停留所がある。其處を過ぎると坂路は愈々急となり山麓を車が走ることになる。車窓左側は線路側の *Tannen* の森を見越して遙かに眺望が展ける。丁度盆地の様になつてそのお盆の中に眞白な雪と眞黒な帯の様な *Tannen* ボイメとが交錯して、北國に見る緩かな山々が肩を寄せ合つて見える。白く川の様に入り込んで湖水の様になつて居る處は所謂 *Fjord*、*グレン*。

丁度 *Standa* に着いた時であつた。ドヤ／＼と小學生が七八人乗込んで来た。電車の中は相當席が一ぱいであつたが此處での乗降で少しは空いた。子供等は空いた方へ席を求めた。さういう時に子供乍らも感心したのは男の兒は決して女の兒の先に席をとらずに女の兒を先にかけてさせる。

嗚呼之は西洋でなくては一寸見られんなあと思はせられた *ドイツ* 語を話すらしい、學校の歸りかと聞いたたら、さうです學校が終つて家に歸るんだと言つて居た。些か厭へられた感がした。子供達や車内の人達に例によつて珍らし相に注視されて居る内に *Midsæm* の停留所に着いた。

子供達は *サヨナラ* と言つて殆んど降りて行つた。此處で降りてもすぐ *Holmenkollen* に行けるんだと *オルセン* 君は話した。

そこから間もなく *Holmenkollen* の停留所へ着いた。

ホルメンコーレン (三一七米)

ホルメンコーレンは丁度今登つて来た丘の最高地點と目測される様な處である。此處へ來ることによつてオスローの方の廣く展いた景色を心ゆく迄眺めることが出来る。案内記などを見ると、此處の記事で *der besuchteste Yngvitsungspunkt der Umgebungs* と書いてある。冬も亦さうして夏も亦さうの様である。此處はオスローを控へて、スキーの競技、そしてスキートゥーレンの中心をなして居る。或旅行記にこんな事が書いてある。

二月には三日間に涉つて此處でスキー競技會がある。

それはノールウエーの "Denby"、とも云ふべく、その日は國家的休日で（註日本の三大祝日の様な意味の休日）其日はオスローの町中の銀行、會社、商店、學校等は凡べて休まねばならぬことになつて居る。

停留所から降りて左側の坂路を登つて行くと路が二つに分れて居る

一つはホルメンコーレンから約二軒程離れて居る Frog-neseferen に通ずる廣い道路で、これを Kaiser-Wilhelm 道路と呼んで居る、

ホルメンコーレンのシャンツエへ行くには、その本道から少しはづれて左側の森の中に入つて行くのであるが、一分足らずで森を突き抜いて行くとカラリと展いた處に出る。そこが有名なホルメンコーレンシャンツエの裾になつて居るホルメンコーレンの湖水である。森の雪は申分なく良い雪である。もう湖水の入口まで森を抜けると左側の丘の森越しにホルメンコーレンシャンツエの檜が見える。そして前方遙かに Voksenkollen の教會の尖塔が中天に高く聳え立つて居るのが眼にとまる。此の尖塔と言ひ此附近のタンネンボイメと言ひ、凍結した湖水と言ひ、それ等は凡

べて私達には懐しいものばかりであつた。私達はもう日本に居た頃から、例のノールウエースキークラブの年報を通してそれ等のものと親しい間になつて居たから。本當に小供達が何時も口にし、念じて居たものを手に入れた時の様な嬉しいそしてゆかしい氣持になつて見とれずには居れなかつた。私は凍結した湖上を渡り乍ら暫し思考せざるを得なかつた。

何と云ふ自分達は幸福なんであらう。思ひもうけぬノールウエーまでやつて来て、そして多年たゞ寫眞のみで親しみをもち、又單に文字だけで近づきになつて居たホルメンコーレンを訪れ、そして數十年來の歴史を熟知し切つて居るホルメンコーレンの湖水、そしてその周りを圍む丘の連り、天を靡す様な教會の尖塔等に眼のあたり接して、やがて十有餘日後には名だたるホルメンコーレンの大競技會を見ることが出来るのである。そして幾多の名人の神技に接することが出来るのであると思ふて、一入私達を送つて下さつた母國の人達に對する感謝の念を深うした。

私達はオルセン君とそしてスキークラブの——氏に伴はれてシャンツエの下に立つた。

繁り切つた森の間に防火線を作つた様にジャムビンゲヒルが遙かに丘の上方に伸びて行つて居る。

アブローチは今年改築されたと云ふことで私達が行つた頃にはシャンツエの上は完成して居たが、シャンツエの下の休憩室になつて居る部分は未だ大工さんが盛んに鑿を振るつて居た。

アブローチは全部木材組の檜で出来上つて居る。シャンツエの端からスタートの最頂點までは約七〇米もあるかと思はれた。スタート台が檜の中間に二個處ある。シャンツエの端から五〇米と六〇米位と見えた。

地上からスタート台の頂までは三〇米はあらうかと思はれる位あつたが、アブローチ全体の傾斜は大して急でもなさ相である。巾は上の方が五米位でシャンツエへの移行部からシャンツエの處が開いて一〇米位まで巾があつたかと思つた。上の傾斜とシャンツエとの移行部の傾斜が大へんよく出来てゐると思つた。

シャンツエは高さ高三米以上はあるかと思はれる位とても高い感じがした。下の斜面が大して急でないから、四〇—五〇米行く爲には、自然台の高さが高くなるらしい。

此處で見た台も矢張り下向きであつた。イタリーが下向き、サン、モリツツが下向き、ポントレシイナが下向と云つた風に、大抵競技用のジャムビンゲヒルは下向きであつた。そして大部分五度以上の傾斜を持つて居た様である。

シャンツエの附根からランディング斜面の、約二五米位までは緩いコンヴェツクに出来て居て、三〇米邊からそのコンヴェツクスカークが二五度位の傾斜になつて、四〇米の前後が三〇度内外で最傾斜をなして居る。五〇米も飛ぶともうあと一〇米足らずで平地に行つて終ふ位で、傾斜と云ひ、距離と云ひ、大したものでない様に思つた。たゞ台が高いから空中で随分高く上るであらうと思はれた。

着陸斜面は矢張り扇形に開いて居る。上の方が三〇米位で下の方が六〇米もあつたかと思はれる。之が大體ホルメンコーレンジャムビンゲヒルのアウトラインであるけれども精しくは後日材料を手にしてから記して見たいと思ふ。

附屬設備としては、ランディングバーンの兩側がずつと下方までスタンドになつて居る。そのスタンドが又曲り角を多く持つ階段の連ぎ合せの様になつて下の方から上の方まで二列位に重つて出来て居る。アウトランの方は左右に

低いスタンドがある。クラブ員の席と云ふことである。

皇族席は下から見て左側スタンドの上方の第一列に設けてある。

審判席はシャンツエの附根から二〇米位下方右側に三段になつて出来て居る。

シャンツエから向つて右方一五米位離れた處に競技出發順の番號の出る揭示臺がある。

アウトランは可成り広くそして奥行をとつて競馬場の柵の様に柵が周らしてある。あとで見えて知つたのであるけれど、飛んで真直ぐに下りて来て、大抵最後のスウィングをする處に飛距メーターの揭示臺が出来て居た。そしてそのすぐ横が柵からの出口になつて居た。

オルセン君に伴はれて上の方へ上つて見た。シャンツエの上にしきりに雪を積んで居た。そして今はもうオールドボーイスにも出場しない元老株が試験飛びをやつて居る。そしてシャンツエに積む雪の高さシャンツエ移行部の傾斜を調べて居た様であつた。小一時間も居て何かと話を聞いて居る時に、しきりにホルメンコーレン競技への出場について催促さるゝ儘に皆で兎に角參加申込むことにした。も

うプログラムの大部分は切つて終つて、出来上つて居るらしかつたが、私達の爲に特に便宜をはかり、出場を許してくれた。

それからすぐ近くの *Midstern* にシャンツエがあるから見に行くことになつて、湖水を横切つて東の方に約一〇分も歩いたかと思はれる處にシャンツエを見出した。例のイタリーで仲良しになつた *Leisenhart* 君とその友達 *Kjeldberg* 君とが来て飛んで居た。

アブローチは五〇米位にしか見えなかつた。大して傾斜は急でない、精々最傾部が三〇度もあらうかと思はれる位である。下の方は矢張りコンヴェックスでホルメンコーレンよりは急の様に思はれた。臺が高いのとアウトランの方がグツと凹みになつて見えた爲かも知れない。此處で *Kjeldberg* 君の物凄いフオールラーゲを見た。上下にとても臀と胸を突き出したフオールラーゲで實際オリズムピアでも何處でも今迄嘗て見たことの無い様なフオールラーゲにすつかり皆が驚いて終つた。

此處にも大して金の費つて居る程のものではないが見物のスタンドがあつたし、飛距米の揭示臺もあつた。矢張り

タンネンボーイメの切展きに出来て居るのが羨しかった。歸りは其處から森を抜けて小さい橋のコースになつて居る道を通つてミッドストウムの停留所から電車でオスローに歸つた。

橋道の處で驚かされたことがあつた。何も氣付かずに歩いて居た處が、突然後ろの方から女學生が二、三人大聲でノールウエー語で叫んで来る。と見ると小さい橋に二人の女が乗つて上から滑つて来るのである。そして一本の長い竹竿を斜面に曳きすり乍ら滑つて来る。あの竿と小さい橋は此處へ来る前に電車で見たけれど何にするのか判らなかつた。橋滑りの梶棒であることが後で聞いて判つた。女學生達は僕達の側を通つてキャツ／＼と言つて笑つて滑つて行つた。

かういう一隊はよく例のオスローからの國道筋で出くわすらしい。

私は日本へ歸つて來てから仲間に話したが實際ノールウエーの女は勇敢だ。北海道邊りの錚々たる女流スキー家はザラに居ると思ふ。そんな第一印象をノールウエーの女に持たせられた。

電車に揺られてオスローの町へ歸つて來た時はもうすつかり暗くなつて居た。明日の午後からノールウエースキークラブ所屬の Skjennings Lyten に案内して貰ふことゝ、一人の Trainer を頼んで貰ふことをオルセン君に依頼して私達はオルセン君を見送つて夫々部屋に歸つて寝ることにした。又馬力をかけて其夜もアサヒへの原稿の續きと、友への便りを數通書いて床に入つた。

枕邊の時計はもう直き午前一時を指しかけて居た。ホテルの中はガチンとも音がしない。たゞ窓外にタキシートの聲が響くのみ、オスローの第一夜はかくして過ぎて行つた。

諾威ホルメンコーレンのスキー大會

伴 素 彦

三月廿九日から、世界で有名なホルメンコーレンのスキー大會が開かれた。

その四、五日前に私達日本選手一行は、瑞西サン・モールツツからオスローへ着いたのであつた。

オリンピックは終了したが、此のまゝ日本へ歸つてはいかにも土産が少い。是非諾威人から瑞西の中でコーチを受けやうぢあないかと言ふ事になつて、諾威の選手や、伊太利のコーチヤーで諾威人であるリスレガルドにも交渉したが、何れも、ホルメンコーレンの大會に出場せねばならないからと斷られてしまつた。フェルドベルクで獨逸の選手權大會があるので、其處へ行つて、大會後獨逸人の教えを乞はうとしたが、獨逸の選手連の都合でうまくいかない。

瑞西人は？ 瑞西人ぢあ心許ない。

其處で金は幸ひ残つてゐる。諾威へ行かうぢあないかと云ふ事になつた。諾威へ來れば、適當なコーチヤーを世話してくれると云ふ事は、諾威スキー協會の會長さんが受けあつてくれてゐるのである。

諾威へ、諾威へ。

あわたどしく荷物をまとめてサン・モールツツを出發し伯林で一日休んで、伯林からオスロー直行の列車にのり込んだ。獨逸のザスニツツから瑞典へ渡りそれからオスローへ着いた。

オスローへ行く途中は山又山で白樺が多く、眞白ないゝスローブにスプールの澤山ついでゐた。村らしい村でもな

い所に大きなシャンツエが聳えてゐる。

汽車の沿線は人家も少く、木造のいかにも北國らしい簡粗な家がボツリ／＼と立つてゐる。眞白く塗つた家の多いのも感じがよかつた。

私達が、オスローの停車場へ着いたとき、スキー協會の人達や、ユルチナで逢つて再會を約した學生達、それから日本人と諾威人との間に出来た日本語のうまいオルセン君達が迎ひに来てくれた。

眞白な肌と金髪の此の諾威には、髪は黒い、黄色い顔のしかも瑞西で雪焼けした私達は、いかにも珍らしかつたらしい。停車場を出ると、一杯の人ばかりで身動きも出来なかつた。巡查が来て、漸つと道をあけてくれた。

北國の首府オスロー。相當に大きな街である。

くらい感じはするが、落ちついてゐる。可成な賑かさである。街には、すてるのかもしれないが雪は至つて少い。しかも滑らない様に砂がまいてある。その砂のうす汚い色が街を暗いものにしてゐた。

歩いてゐる人達は、背の高い、金髪の、肌の眞白な、身なりのいい、いかにも人のよさ相な人達である。

翌日、午後、ホルメンコーレンのシャンツエで試験飛びがある云ふので見に行く。

オスローの町はづれ、マヨロステウムから郊外電車にのる。電車乗場に立つと、あまり高くない森で眞黒な山のつらなりが見える。あれが Holmenkollen だ、こつちが Milsøen のジャムブ臺だと教えてくれる。

此の電車の兩側には、スキーをかける装置がしてある。のる事約三十分位で、ホルメンコーレンの停留場へつく。それまでづゝとのほり。森の間を縫つてまはり乍らのほつて行く。オスローの街が霞んで下に見える。

森の間には、家がボツ／＼ある。木造の氣持のいい家だ。此の邊にすんでゐる人達は、相當な身分の人達だらう。停留場からシャンツエまでは、大きな廣い雪の道がついてゐる。自動車だつて平氣で通れる。オスローから、此の山の上までこんないゝ道が、冬にちあんとついでゐるのである。森の中の道を通つて暫くすると、ホルメンコーレンのシャンツエが見える。そらあすこの森の上に教會の尖塔が見えるぢかないか。寫眞でお馴染の塔が立つてゐる。

シャンツエの構造、見物席。オリンピヤ、シャンツエを



スキーミュージウムの前にて 伴 素彦

見て来た私達は少しも驚かなかつた。

たゞ、そのシャンツエの高い事(三米以上)とランディング・バーンのゆるいのは、意外であつた。着陸斜面は三〇度は恐らくないと思はれる。

三、四人の人達が飛んでゐた。うまい事はうまいが、その感心する程ではない。四十四米位飛んでゐたらう。Vigo Christensen もとんだ。シャンツエの上の雪を削つたり、もつたりして飛んでゐる。委員達が試験飛びをしてゐるのである。此のホルメンコーレンのシャンツエは大會の日だけ即ち年に一度だけ、飛ばせるのであつて、平素は閉ぢてゐるのであつて、今日は大會が迫つてゐるので、殊にアプローチは今年新造(全部木造の槽)したので、大會には出場しない人達が飛んで具合を見てゐるのである。日本とは大分違ふと思つた。

其處から降つて二、三町下の Misteum のシャンツエへ行つてみる。此は着陸斜面が急である。記録は、Zinnund Rund の五十六米である。Hohenkollen のシャンツエよりは飛び易い相である。此處も臺は高い。諾威のシャンツエは、皆空へ高く出る。瑞西の臺は立ち易く立ち易くと作つ

てあるが、諾威はもうさう云ふ時代は過ぎたらしく、立ち難く出来てゐる様である。此の臺でも、ホルメンコーレンの臺でも、スタートする所が實にうまく出来てゐて、興味をおびて作つてあるから氣持がいい。中段からもすぐ滑り出せる。瑞西の様に一度アプローチへ出て、そこから、ジヤムブ・タインをしてスタートする様な事はしなくてもよい。(瑞西でも、諾威でも、スタートするときに絶対に杖を使はせない事を前回の記事に書く事を忘れた様な氣がするから、今此處で書いておく。私も始めの中は随分面くらつてしまつた。) 着陸斜面をあがつてくるのには、木の階段がちあんと作つてある。瑞西の私の見たシャンツエには此はなかつた。此のシャンツエで後に私達を教えてくれた Kalberg と始めて握手した。美しい娘さん達が、ニツカー・ポツカーをはいてみてるた。

橇で滑つてゐる人達に出合ひ乍ら、スキーにのつてゐる人達にあひ乍ら宿へ歸つた。

その翌日 Misteumbakken でスキージヤムピングの競技會があつた。クラブの大會ださうである。

オールド・ボーイス(三十三才以上)と十八・九才の人

達のクラスを含むで約二百名の選手が出場した。

しかもそれが午後の二時から始つて、約二時間程で終了するのである。各人が二回試技するのではあるが、かう早く進行しやうとは想像も出来ない事であつた。

シャンツエの下にジャムバーの番號が出る。着陸斜面の係が宜しいと云ふと、シャンツエの端に立つてゐるスターターが旗を振ると兵隊がラツバを吹く。それと同時にジャムバーはスタートする。飛ぶ。立つ。その間に次のジャムバーの番號が出る。立つたジャムバーが下で滑走をやめない中に飛躍距離が示される。と思ふと次のジャムバーがもう飛出してゐる。矢澤君の計つた所によると多いときは、一分間に六人飛んださうである。まことにめまぐるしいものである。勿論飛躍距離を測るのに、一タテブで測つたり或は瑞西あたりの様に両側から竹竿で着陸地點を指す様な事はしない。計測員が目で見ただけである。着陸斜面の両側に、半米毎に米標が立てゝあるのは言ふまでもない事だ。私と麻生君はサン・モーリッツで知合つた役員の人達の好意で、審判臺へあがつて競技を見物する事が出来た。此の大會で感じた事は、先づ第一に組織のいゝ事である。これ

は前にのべたから言はない。次に出場人員の多い事。しかもそれが皆揃つてうまい事である。ホルメンコーレンの大會では、流石にオリンピッククへ行つた連中が、いかにも光つてゐるが、此の日は何故かさつぱり光らなかつた。それから、年寄りの元氣のいい事である。三十三以上といつたら日本ぢあ出る人なんか殆どあるまい。今年五十五になる人が立派なヒゲをばやして結構に四十米近くを飛んでゐたその意氣の壯なのと、スポーツを愛することの深いのに感心した。

飛躍距離は、青年組よりも、少年組の方が出た。五〇米出た。若い少年だちはいかにも元氣のいい張りきつた飛方をしてゐる。タムスは番外に飛んだ。靜な、空中で、何事も意識してゐる様な、憎い程落ちついた、ジャムブであつた。オリンピックの優勝者アンデルセンは、今日は距離が出ず光らなかつた。

審判する人は全部で六人。クラスによつて交代して、三人宛で審判する。皆いゝ加減な御爺さんである。

余程いゝスタイルで飛ぶと十八點位くれる。そしてノールウエー位になると、スタイルはもうあまり違はないから

結局距離の競争である。

キエルボトンやヘツゲエ、ストア等のランナーが飛ぶ。あんまりうまくない。それでも私達よりはうまいだらう。

此の大會を見乍ら、役員の人が色々の事を教へてくれた。ランディングしてから不安定な滑り方をして、平地のつぎ目で轉ぶのは、日本では立つた事にしてゐるが、ノールウエーでは轉倒と見做す相である。但し安定に滑つて行つて轉ぶのは轉倒とは見做さないとこの事である。之でオリンピックで麻生君が二度とも轉倒と見做された譯が解つた。競技中、皇太子オラフ殿下が、ハンディングにウインド、ヤツケと云ふ致つて質粗ななりで、單身（お伴などはゐない様であつた）ノコノコ審判臺にあがつてこられた。私達と丁寧握手をかはされた。

その夜から私達は、スキークラブの好意で山中の Skjen-nungs ヒユツテに泊る事になつた。

電車の終點 Fjogneretren からスキーを歩いて、ダラダラのほつたり、降つたりして結局約一時間程のほつた處にあるスキーの爲めの小屋である。

眞黒い森の中をうね／＼とした道がついてゐるのだ。

多くの人達に道を尋ね乍らたどりついた。

小屋は高い崖の上に立つて、下に森の山と凍つた湖が見渡される。何時も高い竿の上に諾威の國旗が翻つてゐる。

あちこちに澤山ヒユツテが見える。個人處有のものも多いのださうである。深い森の中の小さい小屋から白煙がゆる／＼と昇つてゐるのを時々見た。寂しさと落ちつきを見せたい風景である。

仲々立派な小屋である。諾威スキークラブの處有ださうである。小屋と言つても氣のいゝ中年の夫妻がゐる炊事をしてゐる。何でも食へる。只水が不便な丈である。

食堂と廣間、それから炊事の室と貯のゐる室と玄關が下にある。二階は六つ室があつて、それ／＼ベットがついてゐる。いかにも感じのいゝヒユツテである。

丁度芬蘭の選手 Lappalainen, Mattila, Knuttila, Niemi, Järvinen が此の宿にとまつてゐた。之は私達には大變都合のいゝ事であつた。

五月の針ノ木岳

小池文雄

五月八日怪しげな天候に逡巡し乍ら、新聞の天候欄に、眼をさらした。「北西の風天氣悪くなる。」とあるも限られたる日時の余裕は少ない。疑惧の念と共に出發した。

午前十一時明科下車、大町への路々には左手に近く燕連峯其れの北に蓮華、鹿島、槍、五龍岳、白馬が連互する。紫に煙る五月の山、中腹以上は未だ醒めやらぬ冬の眠に深い。

對山館にて食料整へ人夫櫻井一雄と共に出發する。蓮華の峯、爺ヶ岳一帯は、薄どんよりの春霞だが毅然とした峯々は夫と指呼される。路々案内の櫻井は、遭ふ人毎に大澤小屋に行くんだと勇み立つ。

大出にて少憩。

春の山々は谷々の奥までも雪消えて、平凡な、笹川谷の

道を、黙々と進む。白澤天狗山より出づるヨセ澤の手前にて、芝生の廣い平に出る。冬であつたらばと其の静けさが見たい氣がする。白澤を過ぐる頃より、谷はV字型に、深くなつて来て漸く人里離れた感がある。南側の日蔭の小谷に消え残つた雪が、薄汚く土に染められて舌狀に、廣がつて居る。

午後五時頃畑山の小屋着、遭難者發掘當時多數の人が入山した時のままなので、中は荒らし放題散亂して居る。櫻井と二人で協力して片付ける、火を焚きつける、山の氣持は又となく良いものだ。前の南側の急な小澤に、残雪が豊富で、其の黒い樹林と共に、山らしい感を強ふる。谷の奥には岩小屋澤岳が眞白な山膚を、其の峯の岩々に交錯させ

てのぞいてゐる。六時頃遂ひに持ち堪え切れなくなつた雨がやつて來た。飯が出來た。大町から持つて來た菜漬と福神漬が副食物。赤い火を見つめ乍ら鍋の飯を頼張る。焔々と燃え上る火よ。絶えなんとする生命の庇護者よ。燃えてはたぎり、たぎつては又燃え上る。寂寞の境に二人の山男の顔を赤く照らし出して、どんろどんろと燃え上る白樺の枝。凡ての煩悶憂鬱憔悴 神經衰弱的な、トラブルサムは拭ひ去られて明皎々たる内心の平靜に歸る。

櫻井は犬の皮を敷き厚い袖無しを着て、爐傍に横になる僕はあるだけのシャツを着て、筵を被つて寝る。七時―十時迄うとうとまどろむ。細雨の交つた嵐の音は、依然やまぬ。籠川の水音と、小屋の裏の小流のさざめきが耳に付いて寝付かれぬ。夫れに下は板敷で身体が痛い。まんぢりともせず居ると、色々の夢とも、現とも付かぬ思索が、腦裏を往來する。破れた棟から雨が洩る。櫻井に聞けば、今年の冬、消防や青年團が大勢搜索に來た時、小屋が煙くて困つて、屋根をむしり取つて煙出しにしたと云ふ。

五月九日午前五時うつゝの夢より醒む。雨は未だ降つて居る。奥の方では、山が叫喚して居る。朝けをしたため、

雨の小やみの間を見計つて出發す。扇澤の少し手前にて漸次晴模様となる。櫻井が、明日は天氣だと喜ぶ。雲は南に流れる。爺ヶ岳の尾根が雨に濡れた清新な色にくつきり浮ぶ。青空が隙間見えて來た。午前八時扇澤ノ出合着、少憩鶯の聲も一きは陽氣になつて來た。五六町行くと、雪道だ。が所々途切れて居り、又木の葉などで汚れて居るので、未だスキーを履く氣にならぬ。

岩小屋澤は雪崩の爲めか無數の大木が無慘にも根こぎにされ、へし折られて、數百米の上から谷底に運ばれて來て居る。本谷に出て始めてスキーを履く。子供の様な氣持になつて、無性に嬉しい。霧は、谷間谷間から立ち昇つて青い空に吸はれて行く。淡い日がさす。午前九時大澤小屋着成澤の長い雪溪に恍惚の眼をやる。

本谷、大澤、鳴澤と未だ一面の雪だ。遠くで黒く見えたのは樹林と、岩陵だ。櫻井と二人で水を吸みに行く。小屋の中を片付け、圍爐裏に火を燃して、軽いエクスタシーに入る。靴油のドライフットの罐が、線香さしになつて、山に眠りし四人の、若人の遺靈に供へられてゐる。自分も線香をあけてぬかつく。

午前十一時頃晝飯をやつて、自分だけで、明日の用意にもと行ける所まで行く心算で、夏スキーを付けて本谷を上る。小屋から三四丁の距離に、幽鬼眠る。赤旗の下、それとなづかれて傷心に堪へぬ。當時よりは、一丈も雪が消えたらしいが、試掘した箇所は未だ二丈もあつて、全々見當が付かぬ。當時の事情と、此の地形と、人夫等の言葉を綜合するに、大澤より更に一つ奥の、南からは入つて居る俗稱赤石澤からの、ドライアヴァランシユが一行を此所まで二町位押し流して来たものらしい。其の中先手の二人は、其の際の強烈な風靡力の爲め、反對側に押し上げられて助かり、後部の五人は夫々比較的表面にあつたので、自力で或ひは朋友の努力に依て助かつたのであるらしい。

本谷の二〇五〇米附近の曲り目まで来ると、眞正面からの猛烈な雨のため、身体はぐしよ濡れになる。峠は間近だが霧のため見えぬ。夏スキーの繩を解いて滑降する。雨に濡れた雪溪の雪は、滑りは悪いが、あの急斜面なので、直滑降でも飛び過ぎる位だ。登りに一時間要した箇所を、八分にして小屋に着く。午後も絶えず降りみ降らすみの天候、蓮華も、赤澤、スバリ、鳴澤も皆頭は雲に包まれて始

原の境に、嵐と叫喚して居る。午後三時頃より岩小屋澤岳許りは怪偉な東斜面を現はして、峯の直下に今にも雪崩れんとする一帯のシユネーフィールドが、上部に物凄じ割目を見せて居る。

名も知らぬ小鳥が、春の訪れを歌つて居る。夕けの膳はまるほしの丸焼きと福神漬、それに若芽の味噌汁。腹が空つて居るのでうまい。ココアを飲み乍ら、櫻井と山の話に耽る。夜に入りても、峯々は嵐の管に轟々と鳴つて居る。

今夜は思ひ切つて暴れて居る。併し明日の天氣を空頼みして氣にも掛けずに眠る。空箱の佛壇には、香煙靜かに煙つて居る。爐に白樺の薪をくべて其の傍で、蒲團被つて寝る。今夜は谷川の音も無い。漸く雨の音もやんだらしい。峯より峯、谷より谷に埋る雪の靜寂に、凡ては吸ひ込まれて行く。躍動する凡ての生命は、未だ此の谷にはやつて来ぬ。

邊りは總て死の世界だ。夜に入りては嵐と霧と、吹き散らされたる小枝、枯葉の音のみの舞臺。午前一時頃、寒くて眼を醒ます。小屋の外に出て見ると、滴るばかりの星が、満天に充ちて居る。暗の中にも爺ヶ岳から岩小屋澤岳、鳴澤、スバリ岳へと、くつきりと浮ぶ。雀躍して再び寢に就

く。

十日午前五時、深山の谷間の夜は靜かに明けた。小鳥が轉つて居る。陽光がさす。爺ヶ尾根からは朝霧が立ち昇つて居る。何ともいはれぬ氣持である。山は今黙止の狀態に立ち還つて、又無きコンデイションを二つの小さき魄に與へんとして居る。昨日に變りたる今の好晴、涙ぐましい迄に感激に燃ゆる。凡てに向つてぬかづき度い。櫻井も非常に勇んで居る。早く朝飯を濟まし、山の神に供へた御初穂を今日こそは、嚴肅な氣持で戴いて四人の亡靈に茶、香を供へ眞劍な登高の意に燃えて、固き決意と一種の不安を交混した感じで今日こそは針の木へと出で立つ。リツクサツクは軽くし、必要な食料と、コッヘルと、スタイグアイゼン、ピツケル、夏スキーを負ふ。櫻井は鉦と、三本爪の金カンデキ、飯盒。

靜かに併しステイデイに。

六本のツアツケが氣持よく凍雪に食ひ込む。本谷は、左右の小谷からの雪崩が押し出して、夫等の落合ひは雪が双方から衝き合つて三四尺もの堤を形成して居る。赤黒く汚れたデブリーが、一面に散亂して居る所、又は風的作用で

雪面が異常に攪亂されて居る所等、流石に、自然の威力の大なるに驚く。約二時間の後針の木峠に立つ。峠の一寸手前は越中側からのウインドシャツテンザイトなので雪庇をなして居り、悪い所だつた。越中からの風が猛烈に強い。併し何と素晴らしい景觀だ!! 槍、穂高は遠く黒く、直ぐ手前には不動岳、三ツ岳、野口五郎、西に黒岳、藥師、赤牛。岩小屋澤岳の尾根の上から鹿島、槍がのぞいてゐる。五龍も、爺も皆居る。

十五分休憩の後、持物は全部此のザツケルに置いて、カメラのみ携へ、ピツケルと、アイゼンに凡てを托して堅き意力の下に針の木の尾根に取り付く、途中二ヶ所許りの岩登りがあつたのみ、後は雪面に慎重にステップを切つて進む。午前十時針の木岳頂上に立つ。

只吾々は立山、劍の尖頂に魅殺され、淨土より、龍王、鬼、ザラ峠へのグラート。北は白馬より杓子、旭、唐松は云ふも愚か、遠く火打、燒、戸隠、岩管、四阿、淺間、八ヶ岳、雪の白峯、北岳、甲武信、木曾駒、秀峯八梁の富嶽まで指呼の間に亂立して、晴天の下に山は歡喜に躍つて、ヨードラを揚げて居る。吾等は只此の大觀に酔ふて暫しは

忘我の域にありしのみ。

四圍をカメラに納め、身体の冷えぬ内にと、元來し路を引返へす。

峠にて暖い日を浴びつつココアを沸かして飲む。ゆつくり晝飯をやつて、復た蓮華の尾根に取り付く。第一のピークにて休む。これから先は殆んど平だ、時々雪の中に深く落ち込む。

一時間半の後蓮華の頂に立つ。

高瀬川の溪谷、籠川谷、鹿島川の合流するあたり、それとおほしき大町の霞み見ゆ。

山の旅が終らうとする時、又しても云ひ知れぬ悲愁が湧いて來た。夕陽が谷に影を宿す迄此の尾根に待つ事にしてあかぬ眺めを貪り食ふ。幸に風は強いが日は暖かだ。蓮華の北側から物凄い底雪崩の音が聞える。

午後三時半峠より降る。谷の上部は鮫鰓穴の様に並列した小さなクレパスがのぞいて居る。今にも落ちさうだ。夏スキーを付けて一氣に降つてしまふ。三時四十五分大澤小屋に歸着、三十分後に櫻井も戻つて來る。

火を焚き付け、成し遂げ得た喜びに、緊張の心は解けて

山の神に向つて感謝を捧げる。

四人の靈に線香を供へる。

山は幾多の、人の子を送り迎へて、永劫に突立つて居る先程の峯々には早や、雲が去來し始めた。明日は又天氣が變るらしい。

うんと悲しい事があつた時、こんな谷の底で大きな山に向つて泣いて見たい。うんと嬉しい事があつた時、あの峯々で大呼、否靜かに首をうなだれて見たい。併しそんな悲喜は、此の山に這入つて來る間に、消え失せてしまふだらう。

夕五時頃一人で夏スキーで大澤を登る。時々聞き馴れぬ小鳥の聲と、岩壁より滴り落ちる水音が心を打つ。故郷の歌を口ずさみつつ、二股の所まで登る。樺の木に繩で目じるしを結び、陰鬱な谷に別れを告げて滑降する。雪は既に凍結して、とても滑る。

歸つたら櫻井が薪を割つて居た。斧の響きが靜かな谷にこだまする。夜はランプの光に古雑誌を読み疲れて、安らかなうまるに入る。

十一日である。昨夜來氣温は再び昇つて、天候は又變る

らしい。それでも山の朝は、いつもながらよい。小屋内を取片付け、線香の火迄消して、四人の靈に、盡きぬ弔意を表しつつ、二夜の宿を後にする。朝の雪に、小さな夏スキーは、心地よく滑る。扇澤出合にて櫻井を待ち合はせ、スキーを結束し、シャツを一枚脱いで少憩の後歸路を急ぐ。大澤は冬でも、此所僅か一里下の扇澤は既に春で、白澤に到れば早や晩春で山櫻今を盛りと咲き競ふ。途中右南花の眞紅のやつを土産にする。午前十一時發電所の電車停留所に着く。昨日の蓮華は春の薄霧の内に睡らうとして居る。近所近邊の爺さん、婆さん連が大町に買物に行くに、此の無料電車を利用すると見えて、僅かの中に五六人集つて来て小さな車に一杯になった。十二時大町着櫻井と別れて復ターモイルの中に這入つて行く。

寫眞説明

◇ サン・モリッツ湖畔

サン・モリッツの湖水を超えて、バードの方から Schutberg (2733m) の展望です。私達は氷りついた湖水を渡つて湖水の向ふ側で寫眞中央の展けた森の間をぬけて、向つて右側のタンネンホイメに包まれて居る、山の裏側にあるポントレシイナに初めて行つて、其處でトロヤニイの七二米のジャムプを見ました。此湖上で今冬國際競馬大會がありました。

◇ スキーマジウムの前にて

ノールウエー、ホルメンコーレン競技會の日スキー博物館の前にて。向つて右 Gröndahlstraten 君、左 竹節作太君。

集稿遺郎太源村岡

スーレ・スタスイデ・ーキス

圓 二 價定・頁百三 ントツコ

吾國最初の萬國オリンピックのスキー派遺選手の一人として雄々しい活躍を期待された彼だった。彼の頃の血の出る如き体験から出たデイスタンスレース並びにスキーに對する研究は當然一冊の本に編まるべきであつた。只遺稿集の名を冠せなければならなかつたのは何とした運命であるかと思はれる。

さうしたこの集には、彼がスキーに志して以來の貴重な研究を「スキー・デイスタンス・レース」なる題名のもとに全部網羅した。スキー・レースの走法、練習法等々のレースに志す人は勿論、又急速に進展しつつあるスキー界の歴史に興味を持たれる人、否スキーに愛を有せられる凡ての諸氏の御讀み下さる事を希望する。

「彼はスキーを愛しスキーに生きた」

延遲りよに合都の輯集稿原・がたしまりあて定豫の版出旬下月三
。したれま込申宛係版出稿遺急至げれな版定限・版出中日近々愈

目丁五十西條二北市幌札

部 版 出 一 キ ス と 山

番五九四八樽水座ロ替振



SKI HEIL

スキ一
ト

其用與全般

中野商店

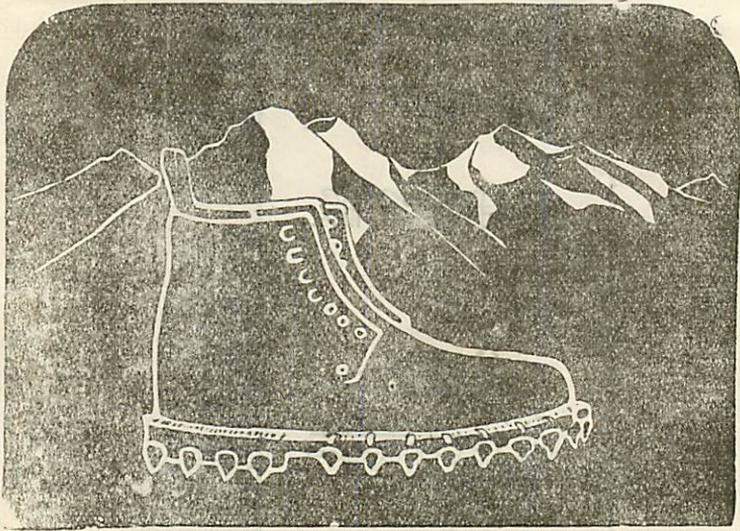
スキ一印スバ

第一級
大量生産

札幌



テ於ニ會覽博藝工産畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小石話電

番七二一六京東替振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます又印書の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和三年六月廿八日印刷

昭和三年七月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 井 出 英 次

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

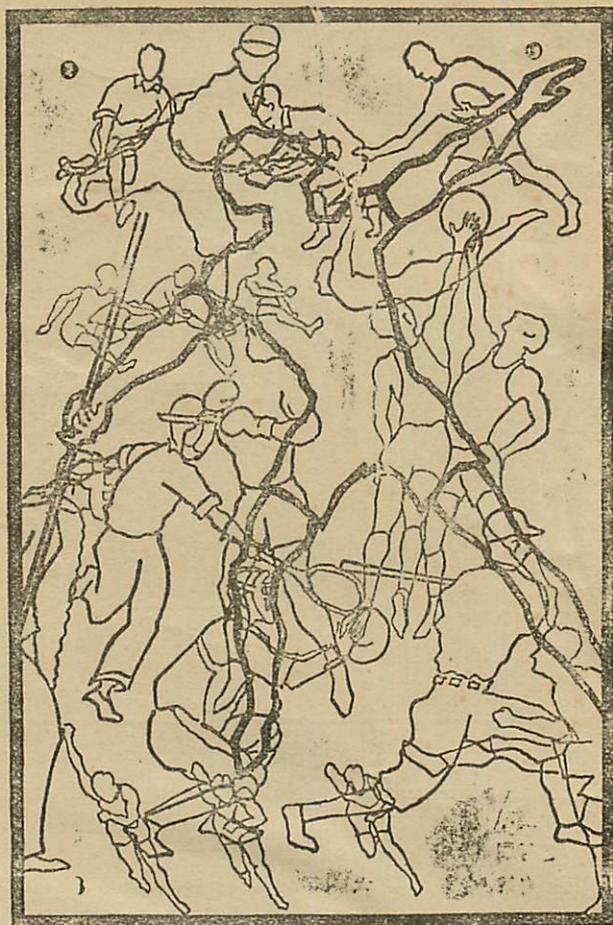
北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替水樽八四九五

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo
No. 88. Julio 1928. Sapporo, Japanujo.

大正三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和三年六月二十八日印刷
昭和三年七月一日發行
本行



美滿津特製

“春より夏へ”の運動具!

合名會社 美滿津商店 東京・本郷
赤門前

電話(小石川) 八四五・二〇七一

山とスキー

第八十三號

定價金參拾錢